

総目次

2018年(第1号～第7号)

[表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ]

特集

第1号

査読者の視点を学ぶ

質的研究論文のための査読セミナーから
(企画:『看護研究』編集室)

質的研究論文のための査読セミナーの背景と査読ガイドラインの提示. 萱間真美, グレグ美鈴. (1) 4-9.

質的研究論文の査読の現状——インタビュー調査の結果から. 福島鏡, 青木裕見, 木下康仁, 麻原きよみ, グレグ美鈴, 小松浩子, 萱間真美. (1) 10-11.

査読におけるマナー. 麻原きよみ. (1) 12-13.

[査読を経て論文はどう変わるか——模擬査読用モデル論文] 急性期病院における新卒看護師の学びの経験——肯定的側面に焦点を当てて(『日本看護学会誌』初回投稿論文). グレグ美鈴, 脇坂豊美, 林千冬. (1) 14-25.

[査読を経て論文はどう変わるか] 模擬査読後のグループディスカッションとガイドラインに関する質疑応答. 萱間真美. (1) 26-28.

[査読を経て論文はどう変わるか——模擬査読において得られたことと査読をめぐって考えること] 1. 査読者と投稿者の共通言語としての査読ガイドライン. 福田美和子. (1) 29-31.

[査読を経て論文はどう変わるか——模擬査読において得られたことと査読をめぐって考えること] 2. 投稿者とともに語り合うための査読. 前野有佳里. (1) 32-35.

[査読を経て論文はどう変わるか——模擬査読において得られたことと査読をめぐって考えること] 3. 査読者と投稿者が信頼関係を構築するために. 新家一輝. (1) 36-40.

[査読を経て論文はどう変わるか] 論文査読のプロセスから投稿者として学んだこと. グレグ美鈴. (1) 41-46.

[査読を経て論文はどう変わるか——実際に掲載された論文] 〈研究報告〉新卒看護師の臨床における学び方の獲得に関わる経験——(『日本看護学会誌』27巻1号掲載論文). グレグ美鈴, 脇坂豊美, 林千冬. (1) 47-59.

査読の質を向上させるために必要なこと——まとめに代えて. 木下康仁. (1) 60-63.

第2号

未来語りのダイアログと オープンダイアログ

看護研究における「開かれた対話」
(企画:『看護研究』編集室)

看護学における「開かれた対話」. 坂下玲子. (2) 98-103.

[講演] Anticipation Dialogues for Integrating Strength and Resources. Tom Erik Arnkil. (2) 104-111.

未来語りのダイアログの実際と意義——「対話」のもつ力. 川田美和. (2) 112-121.

「開かれた対話」の可能性——オープンダイアログと未来語りのダイアログ. 竹端寛. (2) 122-131.

「開かれた対話」をさらに紐解く——竹端寛先生とのメール往復書簡. 竹端寛, 本誌編集室. (2) 132-138.

未来語りのダイアログが生み出す支援者とチームの力——学びを通して実践の可能性を考える. 近澤範子. (2) 139-146.

オープンダイアログ研究における私たちの試行——子ども虐待予防へのアプローチ. 門間晶子, 野村直樹, 浅野みどり, 山本真実, 細川陸也, 佐藤博文, 白木孝二. (2) 147-154.

第3号

看護学における 事例研究法の進化

質的記述的事例研究法の可能性
(企画:黒江ゆり子)

看護学における事例研究法の進化——質的記述的事例研究法の考え方と特性. 黒江ゆり子. (3) 188-194.

看護実践における省察的事例研究法の認識論的立場. 内田雅子. (3) 195-201.

事例研究と省察的看護実践の循環——事例研究論文の筆頭著者と看護管理者への面接調査から. 内田雅子, 小長谷百絵, 木下幸代, 森田夏実, 段ノ上秀雄, 黒江ゆり子. (3) 202-210.

心理臨床学と「事例」に基づいた研究. 山本力. (3) 211-216.

事例報告から事例研究へ——質的記述的事例研究の組み立て. 東めぐみ, 伊波早苗. (3) 217-227.

[質的記述的事例研究の実際] 1. 透析療法を患者が自律して導入するまでの待つ看護. 東めぐみ. (3) 228-234.

[質的記述的事例研究の実際] 2. スティグマにより自尊感情の低下した糖尿病患者の自己コントロール感を取り戻す看護. 伊波早苗. (2) 235-241.

質的記述的事例研究法における倫理的課題を考える. 小長谷百絵. (3) 242-247.

看護学における事例研究法の今後の展望. 河口てる子. (3) 248-251.

第4号(増刊号)

看護の未来を創造する

アクションリサーチ

人々とともに、人々のために

(企画:筒井真優美)

アクションリサーチの意義と魅力——人々とともに、人々のためにある研究方法。筒井真優美。(4) 288–301.

アクションリサーチの方法。草柳浩子。(4) 302–315.

看護におけるアクションリサーチの研究動向。山内朋子。(4) 316–333.

アクションリサーチの実際と成果。江本リナ。(4) 334–343.

Unitary Caring Science as Sacred Science: Social/Sacred Action Research. Jean Watson. (4) 344–348.

神聖なる科学としての統合的なケアリングサイエンス——社会的/神聖的アクションリサーチ。Jean Watson. (4) 349–354.

もう1つのアクションリサーチ——Magaret Newman 健康の理論に基づいたミューチュアル・アクションリサーチ(MAR)研究事例。遠藤恵美子, 三次真理。(4) 355–365.

フィールドにおいてアクションリサーチのもたらす意味——科研と博士論文の取り組みを通じて。伊藤久美。(4) 366–374.

コミュニティにおけるアクションリサーチ。袖井孝子。(4) 375–381.

ナラティヴとアクションリサーチ。やまだようこ。(4) 382–388.

第5号

ケアの意味を見つめる

事例研究

現場発看護学の構築に向けて

(企画:山本則子)

1. 「ケアの意味を見つめる事例研究」着想の経緯と概要。山本則子。(5) 404–413.

「ケアの意味を見つめる事例研究」のプロセス——実践の意識化・言語化から概念化へ」2. 看護実践を書き出してキャッチコピーをつくる。池田真理, 柄澤清美, 山本則子。(5) 414–422.

「ケアの意味を見つめる事例研究」のプロセス——実践の概念化」3. 「大見出し」「小見出し」への整理と学会発表。野口麻衣子, 山本則子。(5) 423–430.

「ケアの意味を見つめる事例研究」のプロセス——実践の文章化」4. 論文化の過程と研究の場づくり。野口麻衣子, 吉田滋子, 池田真理。(5) 431–437.

5. 投稿した事例研究論文が得た査読上のポイントと対応。吉田滋子, 野口麻衣子, 池田真理。(5) 438–446.

6. 事例研究において考えるべき倫理的配慮。山花令子, 齋藤凡。(5) 447–455.

7. 「ケアの意味を見つめる事例研究」の学術性。齋藤凡, 山本

則子, 家高洋。(5) 456–465.

8. 「ケアの意味を見つめる事例研究」の質評価の視点。山本則子, 家高洋。(5) 466–471.

9. 「ケアの意味を見つめる事例研究」が現場にもたらしているインパクトと現場からの示唆。柄澤清美。(5) 472–479.

第6号

国際学会で発表しよう

その研究が、世界をつなぐ

(企画:『看護研究』編集室)

「教員の立場から1」看護学研究の国際化をめざすためには——国際学会発表の指導を通して。牧本清子。(6) 530–536.

「発表者の立場から1」英語での発表という挑戦を後押ししてくれたもの。樋上容子。(6) 537–541.

「教員の立場から2」博士課程指導教員として考えていること。山本あい子。(6) 542–545.

「発表者の立場から2」国際会議でのプレゼンテーションと議論の経験——「貧困と健康」の積み上げ型アプローチ。有坂めぐみ。(6) 546–552.

「教員の立場から3」国際学会発表の意義とその向こう側。山川みやえ。(6) 553–560.

「発表者の立場から3」EAFONSにおけるポスター発表から得られたもの。森木友紀。(6) 561–567.

「教員の立場から4」国際学会発表に向けて大学院生をどうエンパワメントするか。河野あゆみ。(6) 568–573.

「発表者の立場から4」研究を携え、国際舞台に挑戦する。吉行紀子。(6) 574–578.

第7号

アジアの大学を知る

日本の看護研究力を高める

(企画:真田弘美)

大学視察の目的と概要。大江真琴, 真田弘美, 上別府圭子, 山本則子。(7) 620–627.

「各大学の視察報告1」国立台湾大学。北村言, 仲上豪二朗, 真田弘美。(7) 628–633.

「各大学の視察報告2」シンガポール国立大学。武村雪絵, 玉井奈緒, 山本則子。(7) 634–640.

「各大学の視察報告3」香港理工大学。五十嵐歩, 大江真琴, 山本則子。(7) 641–649.

「各大学の視察報告4」香港中文大学。春名めぐみ, 成瀬昂, 上別府圭子。(7) 650–657.

アジアの大学視察で得たもの。上別府圭子, 真田弘美, 山本則子。(7) 658–662.

Leadership in Nursing in Asia and Beyond. Claudia K.Y. Lai.

(7) 663–670.

特別記事

国際共同研究の醍醐味と課題——アジアにおける高齢者施設の認知症高齢者の行動心理症状に関する研究から. 牧本清子. (3) 254–261.

科研費審査システムの改革と看護の動向. 松田ひとみ. (5) 482–496.

PICUに子どもが入室した両親の担った役割 第1報 研究の概要. 戈木クレイグヒル滋子, 西名諒平, 岩田真幸, 村山有利子, 西川菜央, 清水称喜, 渡井恵, 森智史, 佐藤貴之, 増田真也, 中田諭, 辻尾有利子, Ardith Z. Doorenbos. (6) 582–588.

PICUに子どもが入室した両親の担った役割 第2報 医療のモニタリング. 戈木クレイグヒル滋子, 西名諒平, 岩田真幸, 村山有利子, 西川菜央, 清水称喜, 渡井恵, 森智史, 佐藤貴之, 増田真也, 中田諭, 辻尾有利子, Ardith Z. Doorenbos. (7) 676–688.

[国際会議におけるプレゼンテーション] Child Poverty and Health Problems in Japan — No one will be left behind. 有坂めぐみ, 松尾香織, 山村奈津子, 中島麻紀, 稲垣真梨奈, 小林千紘, 宮田春夫. (7) 690–696.

事例報告

温熱療法が神経障害の改善に有用であった好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の一例. 斉藤静子, 押方智也子, 豊田依里子, 田中幸子, 森田春美, 樋口裕子, 釣木澤尚実. (1) 68–72.

連載

理論構築を学ぶ——看護現象から知を生むために

7 研究からの理論構築. 小西美和子／坂下玲子. (1) 86–93.

8 中範囲理論の構築. 福田正道, 武内玲／坂下玲子. (2) 176–183.

9 状況特定理論の構築の試み. 宮川幸代／坂下玲子. (3) 276–283.

10 理論により事例の理解を深める——Transitions Theoryを用いた摂食嚥下リハビリテーション事例. 栗村健司／坂下玲子. (5) 510–518.

11 理論により介入モデルを精錬する——点眼アドヒアランスの概念モデルの構築. 松尾和枝／坂下玲子. (6) 602–609.

12 理論に基づく看護介入研究計画——プログラム開発とその効果評価. 田村康子／坂下玲子. (7) 710–719.

専門看護師 CNSとは何か

CASE4

猫のミーコからアプローチし, 本人が隠していた力を引き出

す. 佐藤直子／井部俊子／大生定義. (1) 74–78.

CNSへのインタビュー——現象学的分析. 佐藤直子／村上靖彦. (1) 79–84.

CASE5

外来化学療法室の喧騒のなかの静謐. 春木ひかる／井部俊子／大生定義. (2) 162–166.

CNSへのインタビュー——現象学的分析. 春木ひかる／村上靖彦. (2) 167–172.

CASE6

自死した母親から離れない姉妹の心の手当て. 比田井理恵／井部俊子／大生定義. (3) 264–268.

CNSへのインタビュー——現象学的分析. 比田井理恵／村上靖彦. (3) 269–274.

CASE7

がん患者の希望を確定し, かなえるためのがん看護CNSのかかわり. 本間織重／井部俊子／大生定義. (5) 498–502.

CNSへのインタビュー——現象学的分析. 本間織重／村上靖彦. (5) 503–508.

CASE8

一貫して本人の意思を問い, 本人のペースを守る. 山下由香／井部俊子／大生定義. (6) 590–594.

CNSへのインタビュー——現象学的分析. 山下由香／村上靖彦. (6) 595–600.

CASE9

オブジェのようであった義足. 米田昭子／井部俊子／大生定義／村上靖彦. (7) 698–702.

CNSへのインタビュー——現象学的分析. 米田昭子／村上靖彦. (7) 703–708.

集まる つながる 広がる 若手研究者のバトン

1 行動し, 振り返り, 研究の思考を磨く. 長谷川直人. (5) 395–399.

2 「伴」に走る——看護という道を, 伴走者として. 坂梨左織. (6) 521–525.

3 人として・看護師として・研究者としての成長. 金岡麻希. (7) 611–614.

書評

『看護学のための多変量解析入門』——多変量解析の魅力に引き込まれる随一のテキスト. 小松浩子. (2) 175.

『病気の成り立ちを知る(基本を学ぶ看護シリーズ3)』——症状と病気について基礎から学ぶ自己学習支援書. 林直子. (7) 673.